

フィールド実習：各フィールドの実施概要（2025 年度）

1. 松山市近郊の地域課題の解決を目指して

参加学生数：65 名

担当教員：徐 祝旗、尾花 忠夫、谷本 貴之、岡村伊織（産業マネジメント学科）

本クラス（履修者数 65 名）では、松山市近郊の企業や地域が直面している諸課題を探り、その解決策を提案することを目的として、各班において調査研究を行った。調査は大街道、銀天街、道後商店街など松山市を代表するフィールドを中心に各地に訪れた人へのアンケートや商店街振興組合へのヒアリングを実施することによって行われた。そうした調査の結果に基づき定量的・定性的な分析を通して、地域課題の解決案を提示した。

2. 企業調査・メーカー調査・見学と 4 サイクルエンジンの分解・組立

参加学生数 13 名

担当教員：高橋 学（産業イノベーション学科）

介護機器製造・販売メーカー（株いうら）について企業調査を行い、プレゼン報告後、見学を実施した。一方、4 サイクルエンジンを分解し、排気量計算のための計測や個々の部品の機能について学ぶとともに、各自 1 部品を選択し、スケッチ・機能調査を行い、エンジンを組立てた。最後にふりかえりを実施した。

3. 愛南町における環境問題への取り組み

参加学生数：11 名

担当教員：斎藤 大樹、後藤 理恵、清水 園子、竹内 久登（産業イノベーション学科）

過疎化と高齢化が進行する愛南町は、人口規模に比して長大な海岸線を有している。本地域における海洋環境問題として、マイクロプラスチック、磯焼け、持続的養殖産業、海岸ごみの課題を取り上げ、学生 11 名が 3 泊 4 日の滞在を通じて実践的な学びを行った。活動の初日には、地域のステークホルダーから愛南町における環境保全の取り組みについて概説を受けた。その後、実際の現場での活動として、海岸清掃、ガンガゼウニの駆除、養殖場における環境配慮型の取り組みを体験した。さらに、マイクロプラスチック問題については、東京大学の研究者より最先端の研究成果に関する講義を受けた。各活動を通じて、現場において必要とされる労力を実際に体感するとともに、過疎化と高齢化が進む地域において、こうした取り組みをいかに持続的に実施できるかについて、プロジェクト型学習の手法を用いて議論を深めた。

4. 大王製紙における製品開発、海外展開、環境への取り組み

参加学生数：13 名

担当教員：福垣内 暁、深堀 秀史（産業イノベーション学科）

日本有数の総合製紙メーカーである大王製紙を訪問し、製品開発や海外展開の状況および環境保護に関する取り組みについて調査した。また、日本でも最大規模の製紙工場である三島工場（四国中央市）を訪問し、最先端の家庭紙および板紙製造マシンを見学した。見学後は社員の方と質疑応答を行った。

5. 愛媛県・20 市町の危機管理職員へのヒアリング

参加学生数 12 名

担当教員：二神 透（環境デザイン学科）

愛媛県防災危機管理課にて、愛媛県としての防災の取り組みと課題に関するヒアリングの後、松山市防災危機管理課にてヒアリングを行った。その後、2 つのグループに分かれて、県内の自治体の危機管理職員へのヒアリングを行った。最後に、それぞれのグループが自治体の規模や災害特性に応じた各行政の取り組みや課題を抽出し、互いに発表することによって情報を共有することができた。

6. 再生可能エネルギー政策をどうする？ ～データサイエンスによる再エネ導入の要因分析にトライ～（愛媛県・東温市・愛媛大学）

参加学生数 15 名

担当教員：入江 賀子（環境デザイン学科）

データサイエンスによるエビデンスに基づく政策が必要であるといわれており、これは、脱炭素政策においても同様である。そこで、学生は、計量経済学の基礎（重回帰分析、操作変数法）とフリーソフト「R」の使用法を学び、再生可能エネルギー政策の推進方法を検討した。初めに現地調査を行った。東温市様のご紹介を得て、東温市学校給食センター様でバイオ燃料の BDF を、レンゴー株式会社愛媛東温工場様にてメガソーラーを、オオノ開発株式会社 フレップとうおん様にて複合リサイクルプラントを見学した。また、各自、興味がある再生可能エネルギーを選択し、導入の要因分析を行った。学生は「太陽光発電の今後について」、「バイオマス発電の導入の現状と要因」、「バイオマス発電の導入要因の分析」、「バイオマス発電と林業」、「水力発電を導入するための良い条件」のテーマで発表を行った。

7. 離島の地域資源および課題調査とツーリズムの提案 -八幡浜市大島地区を対象として-

参加学生数：16 名

担当教員：片岡 由香（環境デザイン学科）

愛媛県八幡浜市の唯一の有人離島である大島地区を対象に、地域住民の方や市役所、島との関係のある会社や団体に対してインタビューおよびヒアリング調査を行い、また、現地踏査によって地域資源を調査し、現状把握と課題解決について分析・考察した。

その上で、大島の地理的・文化的特徴や生業など地域特性をいかしたツーリズムの企画について提案を行った。最終報告会では市役所のご担当者にご意見を伺い、今後の実践活動に繋げていく予定である。

8. 中央構造線と人々の関わりを探る

参加学生数：50 名

担当教員：笠松 浩樹、山藤 篤、石川 慶一郎（地域資源マネジメント学科）

四国を東西に走る中央構造線がもたらす地質や地形などの環境特性に着目した。学生の興味に基づき、景観・観光・ツーリズム、地震・防災、暮らし・文化・風習、神社・信仰・パワースポット、植生・農産物、鉱物の 13 グループに分かれ、多様な観点から調査・考察を行った。現地実習は、西条市、今治市、松山市、砥部町、久万高原町、大洲市、八幡浜市、西予市、伊方町、宇和島市を 3 日にわたって訪れ、踏査やヒアリングを実施した。その結果、中央構造線との関連性はもとより、地域ごとの特性を概観することができた。